

カナダの大学におけるルーブリックを用いたピア・レスポンス活動の試み
—作文プロダクトの分析を中心に—
福岡寿美子, Yoko Azuma Prikryl

これまで日本国内の大学において日本人学生、学部留学生、交換留学生等によるピア・レスポンス (Peer Response) 活動を行ってきた。これらの知見を先行研究として、本研究ではカナダの大学においてルーブリック (Rubric) を用いたピア・レスポンス活動を試みた。

実施時期は 2020 年 1 月、研究対象者は大学 4 年生の日本語クラスの 12 名、日本語能力は N2 ~ N1 である。ピア・レスポンス活動並びにルーブリックを用いた活動は皆初めてである。4 名ずつの 3 つの任意のグループに分かれ、先ず「自己紹介」をテーマに原稿用紙を用いて手書きで各自 400 字の第一作文を書く。次にピア・レスポンスを行い、学習者同士でお互いコメントを言い合い、同じテーマで第二作文を書く。最後にその活動をふり返り、各自のルーブリック (5 項目) に内省および自己評価 (3 段階) を記述する。これらが活動の大まかな流れである。

本研究の目的は、カナダの大学におけるルーブリックを用いたピア・レスポンス活動について、作文プロダクトの分析からその特徴と傾向を明らかにすることである。ピア・レスポンス活動によって得られた第一作文、第二作文のプロダクトについて、日本語教師である 4 名の評価者が、評価基準に基づき、各々 10 点満点で評価を行った。

その結果、第一作文より第二作文の方が平均点で 0.7 点上昇していることが明らかになった。これは日本の大学における日本人学生と交換留学生によるピア・レスポンス活動によって得られた 0.9 点上昇と近い結果であった。

また、ピア・レスポンス活動すなわち学習者同士による推敲活動では、漢字、カタカナの長音や拗音の表記等の修正は行われているが、ねじれ文等の修正は行われていないことが明らかになった。これらについては各学習者による内省型の記述式ルーブリックにおいても多くの記述が見られ確認がなされた。